

平成 29 年 1 月 24 日

## 平成 28 年度国立大学図書館協会海外派遣事業（短期）参加報告書

神戸大学経済経営研究所

末田 真樹子

平成 28 年度国立大学図書館協会海外派遣事業により，英国の大学図書館における利用統計の活用事例に関する実態調査を行った。以下のとおり概要を報告する。

### 1. 派遣期間

平成 28 年 9 月 25 日（日）～10 月 2 日（日）

### 2. 訪問先および担当者

- Imperial College London  
Mr. Stuart Dempster, Ms. Helen Buchanan, Mr. Gavin Phillips 他
- BirkBeck, University of London  
Ms. Elizabeth E Charles, Ms. Catherine Richardson
- Jisc  
Ms. Anna Vernon, Ms. Jo Lambert, Ms. Magaly Bascones 他

### 3. 調査目的

電子リソースの普及に伴い，これらの購入・提供・利用環境の整備は高等教育機関の図書館サービスにとって必須の要素となりつつある。しかしながら，利用統計利用の重要性は認識されているものの，収集方法の煩雑さや統計の標準化など課題も非常に多い。今回の渡航では，英国の Jisc が出資・運営し，電子ジャーナル・電子ブックの利用統計を一元的に提供する Jisc Usage Statistics Portal (JUSP) の現状と課題，参加機関が JUSP を活用することで，各図書館においてどのような業務改善がもたらされたかについてインタビュー調査を行うことを目的とする。

### 4. 調査結果

JUSP はサービス開始から 5 年が経過し，英国のみならず他国からの参加や，コンソーシアムへの技術協力といった成果をあげていることが確認できた。ヒアリング時点で今後の課題として電子ブックへの対応，JUSP が準拠する COUNTER（電子サービス利用統計国際標準）のバージョンアップへの協力などが，あげられた。Jisc では JUSP の管理・運営の他，図書館員とともに Community Advisory Group を構成している。Community

Advisory Group は JUSP へのアドバイスのみならず、JUSP の利用促進にも努め、ユーザーとの連携体制にも力を注いでいることが分かった。

訪問した 2 大学はその規模や特徴が異なり、リソース管理システムの利用有無によって、電子リソースの管理方法にも違いが見られた。Imperial College London ではシステム面では商用ツールを中心に据え、会計システムとのマッピングを課題とし、ワークフローの改善や図書館員のベンダーや出版社との交渉能力の向上プログラムの開発を行っている。

Birkbeck, University of London では商用ツールは用いず、JUSP のデータをスプレッドシートで加工し既存の図書館システムと併用しながら管理業務を行っている。リソース管理の他に利用動向の分析などにも JUSP データを活用していることが分かった。また、Community Advisory Group のメンバーとしても活動している。このように両大学には違いがある一方、利用単価というコスト意識の徹底や、そのための基礎データとして JUSP を活用するなど共通する部分も多く見受けられた。

日本国内の状況と比較すると、国内出版社の COUNTER 対応という固有の課題も指摘されている一方、統計の活用・分析や標準化に向けた課題という面では共通する点も多い。利用統計による各機関の意思決定支援や電子リソース管理業務の効率化を進めるために、電子リソースの利用統計活用等の動向に今後も注目したい。

以上